



2024.4.29 中学・高等学校 自然観察会

恵泉

題字・河井道
2024年度 第2号
2024年7月16日発行

今年度学園は創立九五周年目を迎え、いよいよ記念すべき百周年が五年後に迫ってきました。この大きな節目の時を迎えるにあたり、二大プロジェクトが進行しつつあります。その一つは百周年記念誌の発行で、学園史料室委員の皆様の弛まぬ資料収集整理と、各部門別に協力してくださる旧教職員の皆様による準備会が、着々と進められています。

またもう一つのプロジェクトが、フェロシップホールの再建計画です。現在のホールが建てられてから、既に五〇年余りが経過しており、創立百周年を越えて展開する恵泉教育の、新たな拠点となるような新しいホール建設への夢を私達が描き始めたのは、約二年前にさかのぼります。現在のホールは、毎朝の礼拝の場としてだけでなく、様々な講演会や芸術鑑賞、信和会の行事やクラブ・課外活動などの発表の場としてフル稼働しています。しかし最近では、約八〇名という大人数の課外オーケストラが演奏する際、全員が舞台上がるにも手狭になってきました。また、一〇〇年という歳月を経た恵泉女学園が、さらに近隣の方々から親しまれ、共に平和な社会を実現していくための発信基地となること、今後の私達の目標です。

そのためには、中高の建築委員会として他校のホールを

見学させていただきながら、未来のホールへの夢を膨らませてきました。そして今年漸く、その夢を現実の形にすべく、基本設計業務委託のための公募型プロポーザルを実施するところまで漕ぎつけたのです。その審査員には建築分野で著名な乾久美子先生、小堀哲夫先生、劇場建築の専門家である本杉省三先生をお迎えすることができ、全部で六九ものバラエティーに富んだ設計案が提出されました。例えば、舞台だけでも現在のホールと同じ東向きのものから、反

創立百周年に向かって

中学・高等学校校長 本山 早苗

対の中間側に置くもの、さらに敷地のコーナーに配置するものまで五種類の提案に分類され、建築設計という分野の奥深さを垣間見る機会となりました。提出された案は全て提案者名を伏せて審査され、選考過程で六九の提案書から五案に絞られた後、最終的に妹島和世氏の案が優勝案として選定されました。妹島先生は建築業界のノーベル賞といわれるプリツカー賞の受賞者で、以前恵泉の創立記念式典で講演いただいたこともありまし

た。その際訪れたキャンパスの印象が妹島先生の中に鮮明に残っており、同時に恵泉の教育基盤である聖書・国際・園芸を象徴する建造物として異彩を放つ素晴らしい提案を示してくださいました。建物の外観は花びらを連想させる円形フォルムで、今後恵泉の未来が大きく開花していくことを想起させる、希望に満ちた設計案となっています。審査会場に並べられた全提案書は生徒達も自由に閲覧でき、感想用紙の投稿も募りました。そのうち四名の生徒の感想は、各提案書を精読

し、思慮深く有意義なコメントであると審査員から嬉しい表彰もいただきました。

今回の選に漏れた設計案にも、恵泉の教育への深い理解と提案が数多く盛り込まれており、私達にとっても再び自分達の教育を客観視する機会となりました。その中でも、恵泉の園芸教育の独自性と有用性について提唱するものが目立ったように思います。ホールの周囲に沢山の植栽が施され、園芸を強調する提案も多く見られました。

思い返せば、私が恵泉の中高に在学していた頃、学園は創立

五十周年を迎えようとしていました。当時学園長でいらした秋田稔先生が、「恵泉の心」とは「神以外の何者をも恐れぬ独立人として目覚めるとともに、平和への不屈の意思を持ち、自然に深く根を下ろして着実に人間らしさを取り戻す教育」であると繰り返し語られたこと思い出します。当時、伊勢原にあった短大園芸生活学科で育てられた花々が毎週中学の教室に飾られ、恵泉デーには採れたての野菜が並び、クリスマスにシクラメンやミカンを注文したものでした。私達恵泉生の身近には、いつも園芸の産物があり、それらを通して命の恵みに気づかされ、感謝する心が育まれていったのです。それは現在も中一と高二で必修の園芸の授業で生徒達に脈々と受け継がれています。

百周年記念の新ホールにおいても、毎朝の礼拝で真理の前に静まって謙虚に自己を見つめ、主イエスに倣って互いの重荷を担い合い、神に生かされる全ての命に感謝し慈しむ心を育てる恵泉の教育が、一〇〇年の歴史を越えて受け継がれ、発展していくことでしょう。神様からのさらなる導きを祈り求めつつ、このホールの再建計画を進めていくことができますように、今後も皆様のお祈りとお支えを賜りますよう、よろしくお願いたします。